北九州市立文学館紀要 第4号

【資料紹介】 火野葦平「鵯の日記」解題・翻刻 稲 田 大 貴	3
児童文学の雑誌「小さい旗」解題・総目次(3) 第83号~第107号 小 野 恵	18
	54

2022年3月 北九州市立文学館

北九州市立文学館紀要 第4号

2022年3月 北九州市立文学館

資料紹介

火野葦平「鵯の日記」解題・翻刻

稲田 大貴

本稿では火野葦平(一九○六~一九六○)の未発表本稿では火野葦平(一九○六~一九六○)の未発表を開稿「鵯の日記」を紹介する。本資料は二○一○年に、デジタルデータで全頁を閲覧できるかたちで展示とい、ニ○二○年一一月に開催された「没後六○年ま井家より北九州市立文学館に寄託されたものでます。本稿では火野葦平(一九○六~一九六○)の未発表した。

四〇〇字詰め原稿用紙二六枚。本資料の体裁は、「早稲田大勝堂特製」B4版の

ている。 十四年(一九二五) 十九歳」の項で次のように書い本資料について葦平は自ら著した「年譜」の「大正

「月光禮讚」を原稿用紙に清書し、紹介もなしに

心を持つていたのだが、受けとつて帰った原稿を読 私が童話を書いているというと講談社の少年雑誌 そのままにしてしまつた。(中略)親切な中根氏は、 みかえすうちに、もう書きなおすのがいやになり、 にも難があるので、もう一度書き直して持つて来ま 上、「前半は面白いけれども、後半が弱く、構成上 青二才の私を親切に遇してくれ、その原稿をあずか 新潮社に出かけて行つた。支配人の中根駒十郎氏が れてきた。没書になつたのである。 原稿をあずかつて行つた。それは数日後、送り返さ 工場の中で長いこと待たされた上、 に紹介状を書いて下さつた。私は「ヒヨドリの日 せんか」といつた。私は第二の島田清次郎になる野 という童話原稿を講談社に行つたところ、 しかもていねいに全部読んで読んでくれた 給仕が来て私の

七月、葦平は父の支援により自費出版で童話集『首を談社に原稿を持ち込んだ時期は詳らかでないが、同年が本資料である。新潮社で中根駒十郎の知遇を得、講講談社で没書とされ、葦平の手許に戻ってきた原稿

葦平選集 第八巻』東京創元社、一九五九・六)

本作を葦平は「童話」としている。内容的には、本作を葦平は「童話」としている。内容的には、本作を葦平は「童話」としている。内容的には、本作を葦平は「童話」としている。内容的には、本作を葦平は「童話」としている。内容的には、本作を葦平は「童話」としている。内容的には、本作を葦平は「童話」としている。内容的には、本作を葦平は「童話」としている。内容的には、本作を葦平は「童話」としている。内容的には、本作を葦平は「童話」としている。内容的には、本作を葦平は「童話」としている。内容的には、本作を葦平は「童話」としている。

ではないか。

あった作品と考えられるが、未収録の理由は明らかでない。出版社に持ち込んだということは最も自信のまた「鵯の日記」は『首を売る店』に収録されてい

され(6) この「天才」は、その衝撃から自身の才能への信頼を に『首を売る店』に収録することは考え得なかったの 守るために書きつけられた筆跡と見ることも可能だろ あるいは自分自身への期待は打ち砕かれたのである。 もなく、没書となって原稿は送り返されてきた。自信、 物書きとして自信もあったのだろう。しかし特に言葉 のではないが、北九州で雑誌「揺籃」に作品が掲載 あとに書いたものと推定される。 見せた清書原稿であることから、 字が書き殴ってある(図1参照)。 このように考えたとき、没書となった作品をすぐ 中根からも一定の評価を得た年若い葦平は、 一枚目の右端を見ると、「天才」などの文 推測の域を出るも 手許に戻ってきた 本資料は出版社

以下、火野葦平「鵯の日記」の全文を紹介する。本作は、資料的価値を有すると考える。作品を多く書いており、最初期の児童文学作品として葦平は習作期から、戦中、晩年に至るまで児童文学

(いなだ だいき 学芸員)

- 誌であった。(加藤謙一『少年倶楽部時代』講談社、一九六 ち込んだ二五年創刊号には約四○万部を売り上げた人気雑 談社)から創刊された「少年倶楽部」は、葦平が原稿を持 楽部」を指す。一九一四年一一月、大日本雄弁会(現・講 この時期講談社が発行していた「少年雑誌」とは「少年倶
- (4)(3)(2)『講談社の歩んだ五十年(明治・大正編)』(講談社、一九五 「少年倶楽部」に一九二五年四月から、 九・一〇 同年一二月まで連載

「少年倶楽部」に一九二五年五月から、一九二八年一二月ま

(5)ことにより、大幅に発行部数を落とした「少年倶楽部」は、 華宵は「少年倶楽部」を引き「日本少年」に移った。この ていたが、二五年の二、三月頃、画料を巡って交渉が決裂、 「少年倶楽部」は画家の高畠華宵が挿絵を描き、人気を博し 読み物重視の編集」に方針転換したという。(加藤謙一『少

(6)

「女賊の怨霊」が「揺籃」一九二二年八月号に掲載

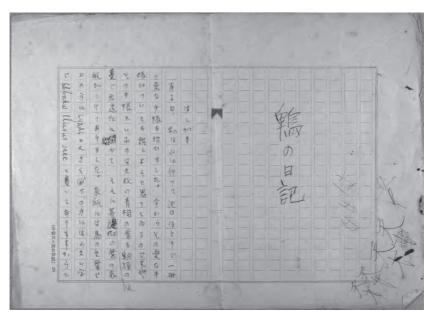
年倶楽部時代』同前

原稿の翻刻は次の方針に拠る。

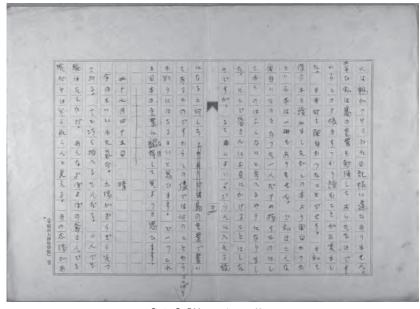
旧字体は新字体に、異体字は通行字体に適宜改めた。

- 削除部分は、原稿の通り削除し、本文に記載していない。 仮名遣いは、 原稿の通りとした。
- 挿入は原稿の指示の通りとした。
- ルビは原稿に指示があるもののみとした。
- 本文中に、今日の人権意識に照らして不適当な表現 があった場合でも、 原文の芸術性・歴史性を考慮してその

ままとした。



【図1】「鵯の日記」1枚目



【図2】「鵯の日記」2枚目

鵯の日記

はしがき

る段になると何しろ鳥の言葉で書いてあるものですか けることにしたのですが、さていよいよごらんに入れ と考へるやうになりました。そこで皆さんにお目にか 鵯がつけてゐた日記帳に違ひありません。幸ひ私は鳥 言葉で上の方に Lyadi と大きく、下の方には小さい字 菩隄樹の葉の表紙がつけてありました。表紙には鳥の九枚の青桐の葉を朝顔の蔓で無造作に綴ぢて、それに しようと思つてゐるのですが、その手帳といふのは 帳を拾ひました。今からその変な手帳についてお話 らこの侭では何のことやらさつぱりお判りにはなるま のをたつた一人だけの持ちものしておくのはよくない でせう。私も随分本を読みましたがこの本より面白か かり読むことが出来ました。まあ何て面白かつたこと の言葉も勉強しておいたものですからこの手帳をすつ で bbbndw llurur oaee と書いてありますからこれは つたといふ一冊もありません。で私はこんな面白いも ある日、私は山に行つて池のほとりで一冊の変な手

ようと思ひます。いと思ひます。で一つこれを日本の言葉に翻訳して見いと思ひます。で一つこれを日本の言葉に翻訳して見

三十七月四十五日

は一寸思はれん。昨日も遊びに行つたら云つてゐたえる。あの太陽があの枯木のやうな腕で拵へたものとんなよぼよぼの爺さんでも腕だけは年を取らんと見ても巧く拵へるもんだて。小人でも腕はたしかだ。あ今日もいいお天気だ。太陽がぎらぎら光つてゐる。

つけ。

いて来るわい。」とつからか昔の若い時のやうな力がによきによきと湧いて歩くのもやっとこさだが、この仕事を初めるとながこの仕事位不思議な仕事はない。わしももう年を「わしももう長い間かうやつて毎日太陽を拵へてゐ

陽を拵へるんだもの。まい。太陽がなかつたら世の中はまつくらだ。その太まい。太陽がなかつたら世の中はまつくらだ。その太なるほどこの仕事位世界で仕甲斐のある仕事はある

聴いたら、に立たなくなつた古い太陽はどうするんだろとこの前に立たなくなつた古い太陽はどうするんだろとこの前でかうやつて毎日毎日新しい太陽を拵へてゐるが役

7

ん中に埋めることにした。」 「こいつは捨て場に困つたが、この頃では地球のま

椋の木にとまつてゐると鶇君が飛んで来て胡桃をく と云つた。道理で山が時々火を噴くと思つた。

がである。 や食つてゐたら大変なことが起つた。食べた数の計算 れた。久し振りの御馳走だから顎を押へてむしやむし

「おい君はいくつ食べた?」

「僕は三つだ。君は?」

になるね?」 「僕は二つだが、ところで二人でいくつ食つたこと

と二つと、……何だか少し面倒だね。」 「さてね、待ち給へよ、三つと二つと、ええ、三つ

四つかな。」

「四つぢやない。……九つかしら。」

かなか六難しい問題だ。 「九つ?そりや違ふ。三つと二つと……こりやな

て訊いて見た。 クタイを気にしながら通りかゝつた。で早速呼び止め 考へあぐんでゐる所へ恰度しやれ者の鰯が新調のネ

「三つと二つで一体幾つになるんだね。」

「はははははは。」

「はははははははは。 そんなことが、ははははははは。」

「ぢやいくつだね。」

「六つさ。」

青空の中へ飛んで行つた。 鰯は吐き出すやうに云つて得意さうについついと

「おい六つかね。」

六難しい三角の本を読んでゐた。で僕たちが恐る恐聞きに行くことにした。耳兎は大きな眼鏡をかけて どう考へても解らないので学者の耳兎さんの所に 「いや六つでもないらしいぢやないか。」

る、三つと二つとで幾つでせうと訊ねると、

「そりや七つさ。」

とすぐに答へた。がすぐ又首を傾げて

……こりや少々難問題だ。待ち給へ。今調べてあげ 「いや待ち給へよ。三つと二つだね。三つと二つと、

て頁を繰つてゐたがやがてはたとひざを打つた。 耳兎博士はさう云つて本箱から厚い大きな本を出し

「五つだ。」

げで腹が減った。

さうだ!五つだ!流石は学者だけある。で僕たちもおい。全くつまらない時間潰しをしたものだ。そのおかい。全くつまらない時間潰しをしたものだ。六つに馬鹿々々しくて仕方がない。食べた胡桃の数がいくつ馬鹿々々しくて仕方がない。食べた胡桃の数がいくつちんというできる。で僕たちもさりだった。

三十七月五十二日 晴

時日ほどびつくりしたことはない。あの時はほんと に居ようとは夢にも思はなかつた。で今から昨日のこ つたらう?一緒に彼奴を見た鶫君はあの時以来熱が出 で感言ばかり云つてゐるさうだ。僕はさうまではなか でを思ひ出しながら書いて見る。あんまりびつくりし とを思ひ出しながら書いて見る。あんまりびつくりし とを思ひ出しながら書いて見る。あんまりびつくりし

る。曲は「まざあ・ぐうすのお婆さん。」聞いているの丘で殿様蛙の管絃楽団がオーケストラをやつてゐに一寸した広場があつてそこには銭苔の丘がある。そに一寸した広場があつてそこには銭苔の丘がある。蓮華の林に茂つてゐる間に時々紫陽花の木が見える。蓮華の林に茂つてゐる間に時々紫陽花の木が見える。蓮華の林に茂ってゐる間に時々紫陽花の木が見える。蓮華の林に茂ってゐる間に時々紫陽花の木が見える。

背にまたがり、やつこらさ、やがて鵞鳥に鞍を置きくれからぐうすのお婆さん

とうつとりする。

で「まざあ・ぐうす」は一先ずおしまひ。 月の向ふへ飛んでつた。…… 背にまたがり、やつこらさ

うなどんぐり眼、黄色い唇、木の葉のやうに蒼い髪、のなどんぐり眼、黄色い唇、木の葉のやうに蒼い髪、うなからからといふ音がする。何だらうと思つてひようなからからといふ音がする。何だらうと思つてひよ鐘草の枝に止つて話をしてゐるとふと糸車でも廻すやに行つた。そこで見たのだ、あの怪物を!僕たちが釣に行った。そこで見たのだ、あの怪物を見つけて休み

廻してゐる。そいつは僕たちの顔を見ると黄色い唇を 髯、手足は枯木よりも細い。そいつがからからと車を

船のやうに開けて

「ふはははははははは」

と笑つた。笑つたには笑つたのだが何故か声は少し

も聞えなかつた。

もう僕たちは腰の抜ける程びつくりして逃げ出

が一体彼奴は何だらう?

三十七月五十三日

見ると何時もの癖で煙草の煙を紫色の輪に吹いた。 まゝ煙草をすぱすぱ吸つてゐたが私がやつて来たのを 物識りだからもしやあの怪物の知つてやしまいかと思 所にでかけた。といふのが小人はこの山でも指折りの つたからだ。小人はまだ仕事を初めないで寝ころんだ 朝起きるとすぐ顔も洗はないで例の小人の鍛冶屋の

と一通り昨日の出来事を話して、さて一体何者だら ああ大ありだ。実に君に訊ねたいことがある。 ばかに早いね。何ぞ用でも出来たのかい。」 やあお早よう。

> 間ばかりして う、と云ふと、小人は眼を細くして考えてゐたが一時

とがつかりしたやうに云つた。 「さつぱり見当がつかん。」

れば外に誰も知つてゐる筈はないが、さて不思議な奴 一番古くからこの山に棲んでゐる小人が知らんとす

もあつたものだ。

やぽつぽつ仕事にでもかからうかい。」 「そんなこた図書館に行つて検べたまへ。それすり

小人はかう云つて腰を叩きながらのつそり立上つ

水晶で拵えてあるよ。」 ら飛んでもない方に反れて行くこたない。 が箱の蓋を開けてくれる。空には軌道がついてゐるか しはそれから帰つて一寝入りさ。時間が来れば『曙』 き燃えつきちまふからね――東の空に持つて行く。わ 出来上つたら水の箱に入れて ―― 水の箱でないとぢ その赤くなつた奴を丸くするのに又五時間かゝるて。 引つぱりながら話し出した。 の中に投り込んだ。鞴を掛声しながら引ぱり出した。 「この真鋳がまつ赤になるまでには五時間かゝるて。 彼は大きな真鋳の塊をよいしよと抱へて来て炉 軌道かね。

読んだ魔法使のやうだ。とさう云つたらふ!と出る。それが小人に反射してまるで何かの本でつぱる。するとその度に鞴の口から青い火が、ふ!うな力を出して身体を波のやうに動かしながら鞴を引よぼよぼの爺さんの癖にまるで血気盛りの若者のや

と云つてははははははと笑つた。「わしだつて魔法使かも知れんさ。」

一寸法師はて来たと見えて水色の帽子は横つちよになつてゐる。の来たと見えて水色の帽子は横つちよになつてゐる。水の家を建てて棲んでゐる一寸法師だ。大急ぎで走つするとそこへ息を切らして飛んで来たのは池の縁に

て行つた。 と早口に云つたかと思ふと又風のやうに飛んで帰ついいよ。明日は久しぶりで雨を降らす考だ。」 ら早く来るのを忘れたが、明日の太陽は拵えなくともら早く来るのを忘れたが、明日の太陽は拵えなくとも

親切ものだよ。」に云つてくりやいいものを。鵯さん、あいつあ全く不に云つてくりやいいものを。鵯さん、あいつあ全く不「ちえつ、人を馬鹿にしてる。仕事に取りかゝる前

小人はいつまでもぶつぶつ云つてゐた。

三十七月五十四日 雨

い。寝ころんで新聞を読む。初号活字で大きな天文学上の争論が載つてゐる。それは月の世界についてだ。上の争論が載つてゐる。それは月の世界についてだ。塚木鳥博士はかう云ふ。月の世界には海といふもの啄木鳥博士はから見ると薄黒く見えるのだ。月の世界には海といふものはない。その代りにあちらこちらに緑の森があつてそはない。その代りにあちらことも出来ない。寝ころんで新聞を読む。初号活字で大きな天文学い。寝ころんで新聞を読む。初号活字で大きな天文学い。寝ころんで新聞を読む。初号活字で大きな天文学い。寝ころんで何をすることも出来なはしない。

んで行つた。見ると星の一寸法師さんからの招待状新聞を読んでゐると懸巣の郵便配達が葉書を投り込は一年中咲いてゐる。代がこの地球からは薄黒く見えるのだ。沢山ある。それがこの地球からは薄黒く見えるのだ。沢山ある

くんだから並大体ではない。で磨き上つたら番号どほドの粉を使ふさうな。何しろ何万といふ星を一日で磨も振らずに星を磨いてゐる。星を磨くにはダイヤモン人の一寸法師さんはアカシアの森の中で毎日毎日傍目一寸法師さんたちはほんとに感心な人たちだ、十三

明日の晩は誕生日だと云ふ

ある。 球で風が吹いてゐたつて空では風の吹かないことも は沢山の星が塊つて流れる。これがつまり彗星で、糸が切れて流れ星が出来る。大風が吹きまくる時に 糸が切れて流れ星が出来る。 ちやと一所に塊つてゐるので少し風でもあるとかち からどんどん外の星を引き上げる。 はせて拵へるさうだ。まづ第一号は宵の明星で、それ りに空に引き上げる。星を吊す糸は蜘蛛の糸を三本合 てゐたつて地球では風の吹かないこともあるし、地 大風と云つたつて無論空だけの話で、空に風が吹い かちとかち合つて星の角が欠ける。風の強い晩には 困ることがあるさうな。何しろ沢山の星がごちやご 天の川には時

探して見てもこの一番面白さうな一寸法師の宴会のこ とを書いた頁が見当たりません。 訳者註。実に残念仕極ですがどうしたものか何処を

うやら尻切れ蜻蛉のやうです。 ことはありますまいからこの一頁は何処かで失くなつこの宴会のことを書かないまゝにして置いたといふ たものと思はれます。さう云へば五十四日の記事もど

四十一月十二日

ひよつくり鶫君が訪ねて来た。 鶇君は私の横 に座る

とすぐ元気な声でかう云つた。

に通つて検べて見たんだが一行もあんな怪物のことを 「いやさつぱりわからない。 「君いつかの怪物の生態がわかつたかね あれから何度も図書館

書いた本はないのだ。」 「ははははは。まあ兎に角行かう。」

「え。なにね。」

「兎に角行かうと云つたのだ。」

何処に?」

一釣鐘草の森にさ。」

会ひに。」 何しに?」

あの怪物にさ。」 誰に?」

?

見て一日魘されつゞけて囈言を云つたといふ本人な 私はもうびつくりしてしまつた。これ があ の怪物を

が鶫君はそんな事には構はずにどんどん先に立つて

飛び出した。で私もその後から続いた。

恐しくなつて鶇君の後から細い声をかけた。にぐんぐん釣鐘草の森に近づいて行く。私はそろそろび越えて釣鐘草の森まで来た。鶇君は少しも止まらずび越えて釣鐘草の森まで来た。蓮華の森や紫陽花の林の上を飛

「君、君、大丈夫かね。」

「大丈夫だよ。

してしまつた。すると傍でれるのだ。私は何が何やら判らなくなつてぼんやりてゐるのだ。私は何が何やら判らなくなつてぼんやりなつた。私は釣鐘草の葉の上に止つてそつと中を覗いなった。私は釣鐘草の葉の上に止つてそつと中を覗いれる。

「少々見かけは物騒だが大人しい男だ。」といふ声がする。何時かの間にか鶫君が来てゐたのだ。へ。」

あいつあ一体誰だね。

なあに『時』さ。」

りおつかな半分で鶫君の後に続いた。すると私を見た『時』と聞いて私もいくらか安心したもののやつぱ

「時」は

「ふははははははははは。」
「ふはははははははははは。」
「なおる。
「なおい眼だつたのだが、近づいて見ると浮標のやうな赤い眼だつたのだが、近づいて見ると浮標のやうなな赤い眼だつたのだが、近づいて見ると浮標のやうなな赤い眼だつたのだが、近づいて見ると浮標のやうなな赤い眼だつたのだが、近づいて見ると浮標のやうなな赤い眼だつたのだが、近づいて見ると浮標のやうなががしてある。

た。すると殿様蛙は首を振りながら を高さと殿様蛙は首を振りながら を高さと殿様蛙は首を振りながらもどうして敵討を したものかその方法が考へ出せない。でこいつのこと したものかその方法が考へ出せない。でこいつのこと したものかその方法が考へ出せない。でこいつのこと であるに違ひないと思つた。がどうもどうして敵討を はあの時丘でオーケストラをやつてゐた殿様蛙が知っ に触つて仕方がない。でやつと熱が去るとどうかして でゐるに違ひないと思つたので早速出かけて聞いて見か を高さと殿様蛙は首を振りながら

です。」 い人ぢやないのですからそれより友達になつたらどうな強い者だつて構ひつこはないのです。がちつとも悪

「あの人に抗ふのはお止しなさい。あの人にはどん

蛙から聞いた。で友達になることにしたのである。さと云つた。あの物凄い怪物が『時』だといふことも

しないよ。」 「交際つて見りや誰だろうとそんなに悪い奴や居や

と鶫君は云つた。

遊んで帰つた、ということだけ書き加へておく。だ、『時』は唖で、その日は蛙君たちも呼んで面白く、少々面倒くさくなつたからこれで切り上げるが、た

使の為だ。
はの為だ。
をしやすること計りだつた。それも皆あの他国の魔法がらあの事を書いて見よう。思ひ出すとどうもむしやがらあの事を書いて見よう。思ひ出すとどうもむしながらあい間日記をつけなかったが今日は思ひ出しな

た。あの生意気な雁奴は、しかし、私たちがずつと前たやうだ。あいつは自分で世界一の物識りだと云つた時には池の縁に咲いてゐた桜草の色が少し計り変つたのは一冊の厚い本を小脇に抱へたまゝひよつくりといつは一冊の厚い本を小脇に抱へたまゝひよつくりと

に非常に困つた難問題も、三つと二つとで幾つだとい

五つ。」

と立ち所に答へて馬鹿にしたやうにふふんと鼻で笑

について噂をしてゐた。 ながら蒲公英の丘の上で、太陽を拵へる小人の鍛冶屋 ある日のことだつた。私は眼白君と朝の太陽を浴び

すると後から働くんだからね。それが毎日だからびつくりするさ。」「さうさ。何しろ太陽を拵へるに十時間ぶつ通しで「さの爺さんも全く働き者だね。」と眼白君が云つた。

「君、君、一寸待ち給へ。」

陽を拵へるつて?その為に爺さんが毎日働いてゐるつ「君たちは聞いてゐれば可怪しいことを云ふね。太つた。と声をかけた者がある。それがあの他国者の雁だ

私はこれを聞いて噴慨した。無茶な話にも程がある。」

のか。太陽は何億万年の昔からただ一つあるきりだ。て?この文明の世の中にそんな馬鹿けた話があるも

ムまたに、ころら至り宛と国してごしてしないないである。く。僕が太陽を拵へる鍛冶屋を紹介してやらう。」「なに、太陽を拵へる鍛冶屋が居ない?よし、来鈴

雁の鼻をあかしてやるのが痛快なのでどんどん鍛冶屋方に引つぱつて行つた。私はこのむかつく程生意気な私はすましてゐる雁の腕を掴んでぐんぐん鍛冶屋の

だ。「それ見給へ。そんな馬鹿げた者が居る筈はないん「それ見給へ。そんな馬鹿げた者が居る筈はない!すると驚いた!鍛冶屋はゐない!何処にもゐない!

の方に飛んで行つた。

てなくなる筈はない。こりやどうしても魔法だ。あ云つただけでは今まで居たに違ひない鍛冶屋が消えた。あいつは魔法使に違ひない。でなきやあいつがあた。あいつは魔法使に違ひない。でなきやあいつがあて悠々と去つて行つた。私はもう口も利けない程だつさう云つて雁はぽかんと呆れて立つてゐる私を残し

で頬白君の家に行つて『時』の所に遊びに行かうと思つたの類白君を誘つて『時』の所に遊びに行かうと思つたの順時』を何処かにやつてしまつたといふのだ。かうだ。が泣きながらやつて来た。聞けばあの他国者の雁奴ががこれはその次の次の次の次の日のことだつた。鶫君

葡萄を御馳走になる約束だ。」 「頬白君、『時』の所に遊びに行かないかね。今日は

「君は今何と云つたのだね?」と云つたら、例の雁がやつて来て

と云ふ。

んぢやない。いやどうも呆れて口も利けん。そもそも御馳走するの、といふ言語同断な話があるつて堪るもも何もないものだから、まして一緒に遊ぶの、葡萄を「『時』?笑談を云つては困る。時といふものには形「『時』の所に遊びに行くと云つたのさ。」

給ふな。」(一緒に来給え。あとで自分の云つたことを取り消しつ、知りもしない癖に大きな口を利き給ふな。ぢやあ「なに?『時』は形を持たないといふのか。ちえ

時なるものの認識は……」

「無論。

「あいつは魔法使だ。」が、どうだ!やつぱり『時』は居ないのだ。つて雁を引つぱつて例の釣鐘草の森に来た。ところ而はすまして答へて反り返つた。鶫君はむか腹が立

から十三人の一寸法師を、水の家から雨の一寸法師あの惨酷な魔法使の雁奴はその後も、アカシアの森友達を取られた鶫君は悲しさうにかう云つて泣いた。

てしまつたのだ。つがそんなものはないと云つただけでそれらは皆消えを、月の世界から海を森を花を消してしまつた。あい

てしまふに極つてゐる。のが日増に無くなつて行く。しまひには何も無くなつく。面白いものがずんずん少くなつて行く。美しいも彼奴の為にこの山からは友達がどんどん減つて行

山中の者はある日嘗て友達の『時』の棲んでゐた釣山中の者はある日嘗て友達の『時』の棲んでゐた釣山中の者はある日嘗て友達の『時』の棲んでゐた釣山中の者はある日嘗て友達の『時』の棲んでゐた釣山中の者はある日嘗て友達の『時』の棲んでゐた釣山中の者はある日嘗て友達の『時』の棲んでゐた釣山中の者はある日嘗て友達の『時』の棲んでゐた釣山中の者はある日嘗て友達の『時』の棲んでゐた釣山中の者はある日嘗て友達の『時』の棲んでゐた釣山中の者はある日嘗て友達の『時』の棲んでゐた釣山中の者はある日嘗て友達の『時』の棲んでゐた釣山中の者はある日嘗て友達の『時』の棲んでゐた釣山中の者はある日嘗て友達の『時』の棲んでゐた釣山中の者はある日嘗て友達の『時』の棲んでゐた釣山中の者はある日嘗て友達の『時』の棲んでゐた釣山中の者はある日嘗て友達の『時』の棲んでゐた釣山中の者はある日嘗て友達の『時』の棲んでゐた釣山中の者はある日嘗て友達の『時』の棲んでゐた釣山中の者はある日嘗て友達の『時』の棲んでゐた釣山中の者はあると言いない。

上はもうあいつの為に亡ぼされる日を待つより外はな鷹が敵はんとすれば一体どうしたらいいのだ。この「あいつにや到底も敵はんわい。」

いのか。

つたといふものがない。噂が立つた。なるほどさう云へばこの四五日来誰も会い魔法使の雁奴はもうこの山には居ないやうだといふがそれから四五日する中に、誰いふとなくあの恐し

鷦鷯が見つけた。鷦鷯君から直接聞いた所に発露が見つけた。鷦鷯君から直接聞いた所になる。 判つた。それは谷の上から大きな石が落ちて来て身体 れが眠つたのではなくて死んだのだといふことがすぐ 鷯はこれはてつきり眠つたのだらうと思つた。 所がそ がそよそよと吹くと鈴蘭の匂ひが谷間から漾うて来 つとりとした眼をして寝ころんでゐるのだ。 蘭を染めて何とも云へず美しい。そのまん中に雁 射して谷間一ぱいに満ち溢れてゐる。それが谷間 青、赤、黄、紫、橙、等の輝やかしい色は橄欖石に反 とふと下の方に例の雁の居るのを見つけた。 い気持になつて御飯を食べるのも忘れて散歩してゐる 夕焼が空を彩つた。あんまり綺麗なものだから彼は かうだ。その日は今までに嘗て無かつたやうな美し すると又四五日したある夕暮、 見てゐると雁の眼はだんだん細くなるやうだ。 鷦鷯君から直接聞いた所に寄れば 魔法 使 0 雁 微かな風 温はう

に当つても少しも動かなかつたからだ。

湧き返るやうだつた。 魔法使の雁の死は山中に伝へられた。 山中は喜びに

け出した。夢中だつた。居た!小人の鍛冶屋は居た! 微かに懐しい槌の音を聞いた。とつちんかん、とつち にこしながら仕事をしてゐた! 長い間魔法のために消されてゐた小人の鍛冶屋はにこ んかん………。私は気狂いのやうに飛び起きた。駈 その次の朝のことだ。私はふと眠りから醒めた時、

私は彼に飛びついた。涙がぼろぼろ出た。

忘れてしまつたのぢやないかと思つて随分心配した。 来なかつたね。旅行でもしてゐたかね。もうわしを かうやつて仕事をやつてゐたよ。君こそ長らく遊びに 「わしかね。わしは何処にも行きはしない |君は一体何処に行つてゐたんだ。| さ。毎日

するとそこへ鶫君が息を切らしてやつてきた。 鍛冶屋の眼にも涙が光つてゐた。 がまあよかつた。」

あた。

鶫君は鍛冶屋を見ると私がしたと同じ様に彼に 飛びついた。 は嬉しさうににこにこしてゐたがやつぱり涙が光つて

> 『時』も帰つて来た。星の一寸法師さんも帰つた。」 「皆かへつて来たんだ。皆帰つて来たんだ。 あんまり感激したんで鶫君は口が利けなかつた。 君、

残念ながら日記はここで終つてゐます。

そして

児童文学の雑誌「小さい旗」

解題・総目次(3)第83号~第10号

小野 恵

成10・11)までの総目次を作成した。「小さい旗」第83号(平成元・6)から、第10号(平

■概要

は、〈運営委員〉として第103号まで荻野泉、倉掛き続き編集委員を務めた(第3号から)。第7号以降、かずよ逝去の翌年、時代は平成に変わった。「小さい旗の会」(水上平吉方)を発行所とし、年二~三回の発行が続く。「同人以外の協力会員、有料読者、三回の発行が続く。「同人以外の協力会員、有料読者、三回の発行が続く。「同人以外の協力会員、有料読者、三回の発行が続く。「同人以外の協力会員、有料読者、三回の発行が続く。「同人以外の協力会員、有料読者、新報治、世良絹子、久富正美、水上平吉の四名が、引を統治、世良絹子、久富正美、水上平吉の四名が、引き続き編集委員を務めた(第3号まで荻野泉、倉掛き続き編集委員を務めた(第3号まで荻野泉、倉掛き続き編集委員を務めた(第3号を入り、第5号を表して第一段の協力として活躍したみずかみがずよりに変わった。

ど (各1)。

同人数は、第100号(創刊40周年記念号)時点で中村房子、その他は久冨正美が手がけている。の三名が務めた。表紙・カットは、第5号~第9号は第104号以降は、倉掛はるみ、世良絹子、水上平吉はるみ、しのはらけいこ、松本梨江、水上平吉の五名、はるみ、しのはらけいこ、松本梨江、水上平吉の五名、

50 名。 黒瀬圭子、坂井ひろ子、徳永和子、はらがいずみな 子、松本梨江(各2)ほか、世良絹子、柏木恵美子、 くろさわるみこ、髙木美樹子、田中まきよ、中下啓 子、矢部協子、吉永光治(各3)、日下優子、倉掛晴美、 原学(各4)、しのはらけいこ、田辺みゆき、方藤朋 6)、立石寿人(5)、坂上万里子、下田麻紗子、 荻野泉、田中良子(各8)、富永敏治、渡辺実穂(各 は以下のとおり(括弧内は作品数)。しんきみこ(11)、 が101作品とおよそ半数を占める。 三本柱として定着で。全200作品のうち、 関東圏までの広い地域からの参加がみられる。 の他、下関、宮崎、 市など福岡県内在住者が33名とおよそ六割を占め、 掲載作品のジャンルは、「創作」、「詩」、「翻訳」が 北九州市9名を含め、 鹿児島 静岡、横浜など九州から 福岡 市 執筆者と作品数 岡垣町、

子(2回・5篇)などが作品を寄せた(括弧内は掲載 回・4篇)、くろさわるみこ(2回・4篇)、下田麻紗 美子(21回 矢部協子 (4回・5篇)、 は全体の約三割を占める56 · 68 篇)、 高瀬美代子 しのはらけ · 18 回 П 0 掲載。 50 篇) 5 柏 を筆 木恵 3

П

数と作品数)。

などの児童文学者の作品をほぼ毎号、 号から同人となった馬場与志子®の二名が41作品を掲 とにより掲載割合が急増した。 の交流については後述する。 の詩を顕彰していくなかで交流が始まった台湾、 (水上22作品 翻訳」 の掲載は全体の約二割。 、馬場19作品)した。 アジアの児童文学者と 水上平吉と、 。みずか 翻訳紹介したこ みかずよ 第 中国 86

第 84 号 である。 7が約65 頁数は、80頁を超える「特大号」― 作品 99页、 数が少ない号は長編作品の掲載に 頁。 掲載作品数は、3~1作品 第 1 0 0号 97 頁) | 第8号 (85頁)、 品と幅が を除 因るも 17 2ある た平 0

本と同じ創刊メンバー・ 町 本 追悼特集は以下のとおり。 廣 (同人)。 遺稿 緋鯉 高 橋さやかが追悼文を寄せ 第 93 号 物 語 の (平成5・5) に 掲載に加 え、 町

> 成7・7)に徳永 でかければ』の出版から縁が続いていた。 岡市)社長の久本は、みずかみかずよの第 水上は、「心の支え」だったと哀悼した。 同誌を支えた。 た。 「火の国」の同人でもあった世良絹子が追悼文を寄せ 勤めながら、福岡市を中心に児童文学活動を行った。 ともいえる先達」だった。西日本新聞社で記者として 同人誌「火の国」『を創刊、「九州の児童文学の草分け らと「九州児童文学者サークル」を結成 なった田辺みゆきが追悼文を書いた。武 などでの児童文学の普及に努めた。 た。 から参加 で「小さい旗」へ作品批評や励ましなどの手紙を寄せ、 中国文学研究者の目加田誠は、 第 96 選者として新しい書き手の育成や、子供文庫 門司は、「朝日新聞」 松尾初美が追悼文を寄せた。 し創作を発表 一 (昭和61まで同人)、 (平成6・7) に門司秀子 目加田を「父」のように慕っていた 和 子 した。 (同 福岡 人)。第49号 水上平吉、 県版 0 Ħ 水上平吉との縁 同時期に同 「お母さん 加 (平成3まで同 (昭和 田 囲 (昭和28) し、 田辺みゆき、 葦書房 第 99 号 は、 誠 一詩集 52 椋鳩十 活動

■創刊40周年

創刊40周年を目前にした第97号(平成6・10)で水創刊40周年を目前にした第97号(平成6・10)で水は対した。「作品の「質」を高めていくことの重要性をない」と、作品の「質」を高めていくことの重要性をない」と、作品の「質」を高めていくことの重要性をない」と、作品の「質」を高めていくことの重要性をない」と、作品の「質」を高めていくことの重要性をない」と、作品の「質」を高めていくことの重要性をない」と、作品の「質」を高めていくことの重要性をある。

正幹、 徳永和子、 や文学賞の受賞者輩出など『に触れ、 的に著名な児童文学者や研究者などのお祝いの言葉、 した。書籍を出版 をぐんと広げる」ことになった出版は大きな成果 水上は巻頭の〈ふぐちょうちん〉で、同人の書籍出版 17作品・全97頁の特大号となった。 (年表・「小さい旗」 九九五(平成7)年一一月、〈創刊40周年記念号) 号数としても記念すべき第100号として発行。 長崎源之助、 坂井ひろ子、 (平成元年~10年)した主な同人は たかしよいち、古田足日など全国 40年のあしあと〉 世良絹子、 黒瀬圭子、 田辺みゆき、 作品のほか、 特に「読者の幅 が掲載された。 だと

> が行われた。 ル)。長野ヒデ子、 い」を開催した 記念年でもあり、 また同年は、 (平成7・ 長崎源之助の講演、 記念イベント「講演と朗 日本児童文学者協会創立50 11 26 詩の 岡 セ 朗 読 ン 読など 夕 0 周 年 ビ 0

なげていければ」と抱負が記された。さしく心は深く』をモットーに、児童文学の発展につい念号には、「『夢はでっかく歩みは着実、言葉はや



第 100 号・創刊 40 周年記念号

■台湾、中国の児童文学者との交流



(左) 台湾の童話「パパの冒険」(林鍾隆・作、馬場与志子・訳) /第87号(右) 中国の童話「おおよろこびのたんじょう日」(方軼群・作、水上平吉・訳) /第90号

89 号)、 が水上の翻訳により掲載された。「草の根の児童文学 寧省児童文学学会)や「大連夕刊」に、「馬でかけれ 師範学校の滕毓旭から「作品交流」の提案を受け んのひざかけ」 より) など同人の作品を翻訳掲載した。 んきみこの童話「きつねのおちば」(ことこおばあさ 詩「仲直り」、柏木恵美子の詩「花のなかの先生」、 に誌名を変更し、かずよの作品のほか、高瀬美代子の 光光」は九二(平成4)年三月から「台湾児童文学」 旗」でも馬場与志子が林の作品を訳し、掲載した。 セイなどが訳され、 訳し(中国語タイトル「小生命」)、「月光光」第70号 に感銘を受けた林は、詩「小さないのち」を中国 かずよの書籍を送ったことから始まった。 文学誌「月光光」®を主宰していた林鍾隆へみずかみ 「金のストロー」「馬でかければ」のほか、 (一九八九・七) に掲載。 また、北九州市の姉妹都市・中国大連市の遼寧大連 台湾の児童文学者との交流は、 阿蘇草千里」ほかかずよの詩が紹介され、「小さ でも第92号から、 相互に作品を翻訳紹介した。「文学少年」 同誌で紹介された。一方「小さい 滕毓旭ら中国の児童文学作品 かずよの代表的 水上が、 台湾で児童 童話、 かずよの詩 エッ な詩

人誌を介した交流が続けられた宮。と、こんなすばらしいことはない」(第87号)と、同運動が草の根の国際交流に発展しているのだと思う

(平成7)⁽¹⁾と続いた。 (平成7)⁽¹⁾と続いた。 (平成7)⁽¹⁾と続いた。

い気がした。アジアと私たちの結びつきを考えていかねばならなか、戦後五十年になろうとしている今、あらためてアがあり、それを作家としてどう表現していくのそれぞれの胸の中に、あるいは原風景としてアジ

第97号、荻野泉の報告より

■みずかみかずよの顕彰

型質 介昌日 中「いたいけんば (四コの) に売る、の評価や顕彰活動についても度々紹介されている。たことは前述したとおり。「小さい旗」では、国内でみずかみかずよの詩が、台湾や中国で翻訳紹介され

なっている。

「あかいカーテン」「ふきのとう」「金のストロー」なっている。

三回忌にあたる九〇(平成2)年、北九州と東京で

いのち』(水上平吉編、石風社)が刊行された。進み、九五(平成7)年、『みずかみかずよ全詩集ちあがった。石風社代表の福元満治を中心に計画が「偲ぶ会」『が開かれ、かずよの全詩集出版の話が持

未熟なものも、推敲の苦心をうかがわせるもの未熟なものも、推敲の苦心をうかがえるのではあるた一人の詩人の心の動きがうかがえるのではあるた一人の詩人の心の動きがうかがえるのではあるたった。やさしさのなかに、りんとした厳しさを秘たった。やさしさのなかに、りんとした厳しさを秘いる。

第91号、水上平吉

(「朝日新聞」夕刊、九六年三月二九日)と評した。ことに対して、まことに誠実で勇気ある詩人である」人間は人間の限界を背負って生きるしかない。そのじた宇宙の姿なのかもしれないのだが、悲しいかな、

朗読などが行われた。 かずよが勤めた尾倉幼稚園園児による歌、献花、 書家の山本飛雲。詩碑びらきは、 事)を発起人に建立。揮毫は水上夫妻と親交のあった 園) は、詩人の岡 が行われた。詩碑「ふきのとう」(八幡の小伊藤山 (下関中央霊園) 詩碑が二基、 は、九五年四月一六日に詩碑びらき 建立された。 .田武雄(北九州詩人懇話会代表幹 詩碑「金 九七年三月三〇日。 0 ストロ ֓֞֝֞֞֝֞֜֝֞֞֝֞֜֝

(おの めぐみ 学芸員)

えてくるものを求める。それは生誕した瞬間、身に映な、自分を捨てず、他者を受けとめる努力の果てに見受賞。選考委員のひとり森崎和江は、「その作品はみた。刊行翌年、同詩集は第五回丸山豊記念現代詩賞を年譜が付され、人と作品の全容が分かるものとなっなど約六○○編を掲載。水上平吉による「かずよ抄」、「小さい旗」に発表した詩や、闘病中に詠んだ短歌

注語

- (1) 第88号 水上平吉の〈ふぐちょうちん〉。
- (2) イラスト、報告、紹介、来信、追悼、広告、巻頭の〈ふぐ

(7)

ちょうちん〉などは除く。

- 湾、マレーシアの児童文学を紹介した。 中国文学の翻訳を手がけていた。「小さい旗」では中国、台中国文学の翻訳を手がけていた。「小さい旗」では中国、台
- 「北九州市立文学館紀要(第一号」に詳細を記している。(4)「小さい旗」は「火の国」から分かれて北九州で創刊された。湾、マレーシアの児童文学を紹介した。
- 動した。 (5) 「きびしいご批評をお願いします。率直なご感想やおしかり(5) 「きびしいご批評をお願いします。率直なご感想やおしかり
- (6)よなら、名犬平治」(東宝)。一九九三(平成5)年、 ひらめく」が第一回新・北陸児童文学賞 和教育映画社)、一九九二(平成4)年 芸術文化振興奨励賞受賞。一九九八 会主催)受賞。一九九二(平成4)年/黒瀬圭子が下関市 一九九○(平成2)年/富永敏治「サーモンピンクの旗は (平成3) 。ありがとう!山のガイド犬「平治」』が映画化/一九 『炭街』で福岡県詩人賞受賞。その他、 アニメ映画「山に輝くガイド犬平治号」 (平成10) 年 映画「奇跡の山 (北陸児童文学協 坂井ひろ子 黒瀬

定期演奏会(同年・9・12、下関市民会館)で披露。圭子『白いなす』が混声合唱組曲となり、下関市民合唱団

の沖縄戦』(偕成社、平成7・7)、世良絹子『お日さま笑 12)、坂井ひろ子『そのとき、 成6・3)、富永敏治『とべ!!翼竜号』(ポプラ社、 5・11)、高瀬美代子『仲なおり』(第8号) をわけあった牛がえる』(石風社、平成5・4)、柏木恵美 成3・7)、坂井ひろ子『盲導犬カンナ、わたしと走って!』 坂井ひろ子『待ちあわせは泰山木の下で』(くもん出版、 徳永和子『白いシマチョゴリ』(教育画刷、平成3・7)、 ゆき『インコのルーのおくりもの』 (講談社、平成2・10)、 う!山のガイド犬「平治」』(偕成社、平成元・6)、 タ』(新日本出版社、昭和63・12)、坂井ひろ子『ありがと 昭和63・10)、坂井ひろ子『いじめっコウタはあまえっコウ の主な出版書籍は以下のとおり(初出が「小さい旗」 (岩崎書店、平成5・3)、なかむらふさこ『月とごちそう (偕成社、 一九八八(昭和63)年~一九九六(平成8)年までの同人 号数を補足)。黒瀬圭子『いっしょにあそぼ』(国土社、 少年詩集『花のなかの先生』(教育出版センター、 光っちゃんがわらった』(第91号 ポプラ社、 田辺みゆき『ふたりはチビ山同盟』 - 平成4・3)、黒瀬圭子『先生のきいろいパンツ』 ぼくは戦場にいた (講談社、 /銀の鈴社、 平成6・ 平成8 平成8・ 田辺み 勇たち

- 版社、平成9・3)、 平成8・7)、 平成10・10 荻野泉『ムーンとぼくのふしぎな夏』(第87号/石風 富永敏治 田辺みゆき『キキあずかります』(講 『地の底にいななく』(解放出
- (8)童文学」に誌名を変更した。 「月光光」は第78号で終刊し、一九九二年三月から「台湾児

(14)

(9)国・上海で開催)に参加するなどした。 二回日中児童文学シンポジウム」(平成5・5・15~17、 その他に水上は、松谷みよ子、 鳥越信らを代表とした「第 中

(15)

荘

- (11)(10)供たちとともに……」と題し記念講演を行った。 スにて開催。児童文学者かつおきんやが「今、アジアを子 一九九三(平成5)年八月二八日~三〇日、宗像ユリック
- りだった。 坪田譲治文学賞、 るさと 私が日本にいたときのこと』(福音館書店、平成5・ ンクムを招き講演会、分科会が行われた。イは、『半分のふ 九九四 で日本児童文学者協会新人賞、 国民宿舎ひびきにて開催。韓国の児童文学作家イ・サ (平成6) 年八月二○日~二一日、 岩崎京子との対談も行われた。 サンケイ児童出版文化賞を受賞したばか 野間児童文芸新人賞、 宗像ユリック
- (12)(13)合唱組曲は 一九九五 (平成7) 年八月一九日、 「馬でかければ 阿蘇草千里 宗像市中央公民館にて ―」「ケヤキの新芽

- 国で歌われるようになった。 3) 年四月、音楽之友社より合唱譜としても出版され、 「おはなしだいすき」「かみなり」「二月の雪」「備前焼の大 「燃える樹」の全七章で構成される。 九九一
- がやき」(光村図書)。 籍)、「国語 五年上」(光村図書)、「夕立」/「国語 掲載教科書は、「つきよ」/「小学国語 二年下」(学校図書)、 - 馬でかければ―阿蘇草千里」/「小学国語 四年上」(大阪書 四上:か
- 籍などが展示された。 詩人 みずかみかずよの世界展」を開催。 月一一日・一二日、「偲ぶ会」に加え、 北九州では一九九〇(平成2)年九月三〇日に、 (八幡西区)にて「偲ぶ会」が行われた。 展覧会「愛に生きた 東京では同年一〇 原稿、 橋がん

凡例

から第一○七号(一九九八年一一月発行)までの細目である。(二○二二年二月発行)のうち、第八三号(一九八九年六月発行)掲載するのは、「小さい旗」(二号まで「小さな旗」)全一四八号

- 号(1989年・夏))、
 、各号の見出しは奥付に従い、巻号、発行年月日、編集委員、各号の見出しは奥付に従い、巻号、発行年月日、編集委員
- 所などはジャンル名を付けず ― とした。各項目の記述は、ジャンル・表題・執筆者名(または画家各項目の記述は、ジャンル・表題・とに改行した。記載にいるでは本文にある表記を優先し作成した。ジャンル名とは 一 とした。
- は、便宜上編者がノンブルを付した。ページ順とした。底本にノンブルが記載されていない場合細目は底本の目次に掲載がない項目も含め、配列は本文の
- 新筆者の表記に関しては、同人名簿・執筆者住所、寄贈図執筆者の表記に関しては、同人名簿・執筆者住所、寄贈図
- 、明らかな誤記・誤植と判断されるものは訂正した。

募集ほか) 募集 (新美南吉童話賞創作童話	来信 おたより 矢部協	里―/ほたる) 林鐘隆	たとえば/馬でかければ―阿蘇草千	/みのむしの行進/ぬくみ/よろこび/	/うまれたよ/つきよ/きんのストロ	紹介 中国語訳 みずかみかずよの詩(せのび	に/海外にもファン	紹介〈みずかみかずよの詩の波紋〉三教科	1回車)	子『へんしんタヌキのかくれんぼ』ほ	紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅲ(佐和夏	創作 阿蘇の火炊き乙女 下田	イラスト〈絵のページ〉田植え教室 ケ	び、ふじの実柏木	つる、雨のシロホン、ふじの花、こもれ	詩(ふじだなの下で)冬のふじだな、若	にゃん』ほか六二冊)	童文学者協会編『はちまきしめたねこ	紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅱ(日本児	創作 おばあちゃんの薬 田中
話 	矢部協子ほか 76	隆 (訳) 70	丰	/	Ī	び	 69	書	 68	ほか	夏	下田麻紗子 36	久冨正美 34	柏木恵美子 32	ň	γ, 2	31	2	1900年	田中美代子 21
ィラスト〈絵のページ〉(無題)創作 一日一善日誌	詩 赤ちゃん/夏の日/曼珠沙華	創作 一日おくれのバースデーケーキ	うど	詩(鳥たちのうた〉ゴイサギの親子、	創作 ひろしがひろった百円玉	創作 ぼくのはなしきいてよ	『ま夜中のおきゃくさま』ほか七冊)	紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅰ(岸武雄	創作 いつもともだち	よを偲ぶ会	随筆〈ふぐちょうちん〉東京と北九州でかず	紹介 同人の新刊	小さい旗の会(発行所)	富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉(編集委員)	平成二年一	第八六号(1990年・冬)		広告 石風社	ー あとがき	紹介 第七回子どもの本全国研究集会ほか
久富正美 22 20	高瀬美代子 18	しんきみこ 11	柏木恵美子 10	かり	日下優子 5	吉永光治 4	3	岸武雄	吉永光治 2	水上平吉 1	でかず	見返し	(発行所)	編集委員)	成二年一二月一六日			—— 裏表紙	水上平吉 77	カ ³

の「びすたーり」に30人。 くろさわるみこ 愛に生きた詩人の世界展も 東京・経堂	報告 野菊のようなかずよさんを偲んで		紹介 みずかみかずよさんを偲ぶ会	八冊)	よいち『七人のおかしな妖怪たち』ほか	紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅳ(たかし	ターと中国語訳 ――	紹介〈みずかみかずよの詩の波紋〉ファンレ	来信 おたより 目加田誠ほか	林鍾隆(作)、馬場与志子(訳)	翻訳〈台湾の童話〉緑の国の人びと	詩 紙/ぼく (1)/ぼく (2)/あめ 吉永光治	一 (二)(車)	江『おまつりの日のさようなら』ほか	紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅲ(松本梨	創作 本当にあった話 矢部協子	曲)	子『ハルさんのすてきなしごと』ほか八	紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅱ(小林陽	創作 海の音がきこえた 田中良子
43		41		40			37		36	32		31	30			29	28			24
創作 ムーント	便り(7)		紹介 同人		富永敏治、	第八七号		広告			紹介		紹介		批評		批評			紹介
ムーンとぼくのふしぎな夏		〈ふぐちょうちん〉台湾の林さんからお	同人の新刊	小さい旗の会(発行所)	•	第八七号(1991年・春) 平成三年三月一〇日		石風社	あとがき	子『ふるさと昔話 山口編』ほか五六冊)	新刊紹介〈受贈図書·雑誌〉VI(黒瀬圭	遠賀町立島門小学校(四年一	〈児童の読書感想文〉『ふたりの海	たり』	:〈書評〉中澤晶子『白ネコ横丁冬ものが	うなら」	=〈書評〉松本梨江『おまつりの日のさよ	ほか五冊)	子『ネコジャラシはらっぱのモグラより』	新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉V(吉田道

\circ	()	6			- 1
	翻訳〈台湾の童話〉白鼻キツネ物語	66	星加輝光ほか	おたより	来信
柏木恵美子	詩 ペルシャ湾のウミウ 柏木	65	馬場与志子		
	二三重)		くりもの』、北原宗積『影よさらば』	くりもの』、	
か	きみこ『エリちゃんでておいで』ほか		田辺みゆき『インコのルーのお	〈書評〉田田	批評
ĥ	紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅰ(あまん	61	E (8)	交流マスコミに(8)	
るみこ	創作 はなみずきの咲くころ くろさわるみこ		〈みずかみかずよの詩の波紋〉台湾との	へみずかみ·	紹介
久冨正美	イラスト〈絵のページ〉星の降る夜	60	介『鬼といりまめ』ほか二七冊) ―――	介『鬼とい	
高瀬美代子	詩 仲直り 高瀬		新刊紹介〈 受贈図書·雑誌〉Ⅲ(谷真	新刊紹介〈	紹介
しんきみこ	創作 ことこおばあさんのひざかけ しん	56	林鍾隆(作)、馬場与志子(訳)		
水上平吉	水		話〉パパの冒険	〈台湾の童話〉	翻訳
た	随筆〈ふぐちょうちん〉台湾に行ってきました	55	幹『ズッコケTV 本番中』ほか七冊) ――	幹『ズッコ	
見返し	紹介 同人の新刊		新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅱ(那須正	新刊紹介〈	紹介
打所)	小さい旗の会(発行所)	54	吉永光治	ボール	創作
安員()	富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉(編集委員)	51	しんきみこ	冬の菜の花	創作
九日	第八八号(1991年・秋) 平成三年九月二九日	50	吉永光治	鳥と石	詩
		49)はね 柏木恵美子	とびいろのはね	詩
— 裏表紙	広告 石風社	48	高瀬美代子	いのち	詩
水上平吉	― あとがき 水	46	ジ〉 (無題) 久冨正美	イラスト〈絵のページ〉	イラスト
	— 執筆者住所(七名)	45	I	(
照	子『心をつなぐ糸』ほか九冊)紹介 新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅳ(武井照		-の町のサツキ作り』ほか一三〈受贈図書・雑誌〉I(岩崎京	子『サツキの町のサ新刊紹介〈受贈図書	紹介

紹介	来信	詩	紹介		報告	紹介	投稿	批 評	批評		批評		紹介
執筆者住所(七名) 子『白いチマチョゴリ』ほか二九冊)新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅳ(徳永和	おたより 村中李衣ほかくろさわるみこ	夕暮れ/キンモクセイ/夕顔科書と合唱譜に『	〈みずかみかずよの詩の波紋〉四つの教	<u>.</u>	サツキ作り』のトリオ 岩崎、長野、津「創作」サカナに昼食会―『サツキの町の	夫『いちごおいしいね』ほか七冊)新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅲ(小暮正		〈書評〉小関秀夫『詩集 風 栞』 柏木恵美子馬場与志子	〈書評〉丘修三『夕日の三・三・七びょうし』	馬場与志子	〈書評〉徳永和子『白いチマチョゴリ』	五八冊)	子『としばあちゃんのケン玉作戦』ほか新刊紹介〈受贈図書・雑誌〉Ⅱ(山口節
	かこ			泉			苗	字 学		学			
36 36	35 34	32	2	31		30	30	29 29		28		27	
来信 おたより おしこ『ユーカリのユウ』ほか	翻訳〈台湾の児童文学〉阿輝の心	イラスト〈絵のページ〉やっと間にあっ		新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉	創作 オムレツどりの王さま	詩(新しい橋)ヒルガオ、機械、目を向けよう	随筆〈ふぐちょうちん〉アジアの5	紹介 同人の新刊 小さい旗の	富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平	平成三年	第八九号(1991年・冬)		広告 石風社 ― あとがき
おたより	〈台湾の児童文学	〈絵のページ〉や	あつこ『ゆうれい君と一子』ほか一一冊) ― 7	新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅰ(あさの		〈新しい橋〉ヒルガオ、目を向けよう	〈ふぐちょうちん〉アジアの児童文		世良絹子、久冨正善	平成三年一二月一五日	第八九号(1991年・冬)		

おばあさんを呼ぶ花 寺沢えいこ 33 宛、 一九g	創作 おしっこチロロー小鳥のうた 田辺みのき 8 紹介 みずかみか	詩 制服のあなたへ 寺沢えいこ 27 来信 おたより	創作 ツトムとレーコのゲームセット 荻野泉 16 ― 執筆者住所	二冊) - 15 か七冊)	太郎『だれかにあったはずなんだ』ほか	紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅰ(内田麟 紹介 新刊紹介〈:	創作 こんにちは 通 橋 の町 下田麻紗子 2 ものがたり―	水上平吉 1 創作 ムツゴロウ	随筆〈ふぐちょうちん〉生き生きした絵本 ィラスト〈絵のページ	紹介 同人の新刊 — - 見返し アケラン 『c	小さい旗の会(発行所) 紹介 新刊紹介〈:	富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉(編集委員) - 創作 クララ発・SOS	第九○号(1992年・春) 平成四年三月二九日 - 詩 えみちゃん/限りなく	い』ほか五冊	広告 石風社 ― 裏表紙 かをり『バ	一 あとがき 水上平吉 77 紹介 新刊紹介 〈・	宛、一九八五年一〇月三〇日付) 水上平吉 76 う日	紹介 みずかみかずよの手紙(くろさわるみこ 翻訳〈中国の童話〉	りか『もうすぐクリスマス』ほか一四冊) ― 75 平 『友だち
五月二四日付/五月二八日付/	がずよの手紙(京都志朗宛、	木暮正夫ほか	(八名) — —		『ちいさいちいさい手をつないで』ほ	〈寄贈図書・雑誌〉V(香山美	— 富永敏治	世界の空を飛ぶ一野中繁吉	〈絵のページ〉バトンリレー 久冨正美	『危険な金曜日』ほか二六冊) ―	〈寄贈図書・雑誌〉Ⅳ(T・ビ	SOS しのはらけいこ	/限りなく 高瀬美代子	曲) ————————————————————————————————————	かをり『バスにのってはじめてのおつか	〈寄贈図書・雑誌〉Ⅲ(としま	方軼群(作)、水上平吉(訳)	話〉おおよろこびのたんじょ	平『友だちなんていわない』ほか四冊) ―

柏木恵美子 34 紹介 同:	青いセーター/バイオリンとおじさん	神父さま/ジュウシマツ/ユリカモメ/ 富永敏治、ヨ	しこ『魔女見習い通信』ほか四○冊) − 3	新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅱ (石田と 第九二号)	おばあちゃんはキャリアウーマン 渡辺実穂 23	イーラスト〈絵のページ〉さかだちごっこ 久冨正美 22 広告 石目	光/魂のいろ 高瀬美代子 21 - あ	ほか一九冊) - 20	ろ子『盲導犬カンナ わたしと走って!』	新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅰ(坂井ひ 紹介 み	お日さま笑い 世良絹子 2 連	集 水上平吉 1 紹介〈み	〈ふぐちょうちん〉みずかみかずよ全詩 来信 お	同人の新刊 — 製造 — 執約	小さい旗の会(発行所)	世良絹子、久冨正美、水上平吉(編集委員) 紹介 新記	第九一号(1992年・夏) 平成四年七月二六日	翻訳〈中	石風社 — 專素紙	
紹介 同人の新刊	小さい旗の会(発行所)	世良絹子、久冨正美、水上平吉(編集委員)	平成四年一二月二〇日	第九二号 (1992年・冬)		石風社 — 專素紙	あとがき 水上平吉	九八七年二月十五日付ほか)	九八八年八月十日付/富永敏治宛、	みずかみかずよの手紙(松永伍一宛、	連に 児童からは感想文 ― ―	〈みずかみかずよの詩の波紋〉台湾、大	おたより 松谷みよ子ほか	執筆者住所(六名) — — —	『電話BOXのむこうがわ』ほか八冊) ―	新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅲ(北原宗	陳伯吹(原作)、水上平吉(訳)	〈中国の絵本〉井戸の中の四ひきのカエル	徐徳霞(作)、馬場与志子(訳)	

来信 おたより (世界の子どもたちシリーズ1) 馬場与志子批評〈書評〉後恵子『風がわりなペット』			創作 リョウさんのハッカケ山診療所日記 はたる、みのむし 柏木恵美子詩 〈虫たちのうた〉ちょう、てんとう虫、 月冨正美	朝顔/午後の面会時間四○冊)	紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉 I (たじま創作 スターチョコに手をだすな - 徳永和子 西日本文化賞を喜ぶ - 水上平吉 - 水上で書
51 50 3	6 34	33 22	20 18	17 16	2 1
in宗像を成功させよう!!随筆〈ふぐちょうちん〉アジア	司入)所引 世良絹子、	広告 石風社	紹介 新刊紹介 〈紹希詩〉書 おり 報介 新刊紹介 〈	\ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \	老介 新刊紹介〈寄贈図紹介 新刊紹介〈みずかみかずよる
ごせよう!! 水上2〉アジア児童文学大会	久冨正美、水上平吉(編集委員) 久冨正美、水上平吉(編集委員)		之助『宝ふくべ』ほか九冊)新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉V子『亀八』ほか二五冊)	(技稿等) 落葉 (徳永和子みずかみかずよの手紙(徳永和子みずかみかずよの手紙(徳永和子	夫『ぼくとおとうさん』ほか一二冊) 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅲ(宮本忠れば」中国をとぶ

追悼 惜別	紹介幹新	和訳〈中 来信 おね	創作あまった	詩紹介 新聞 衣 新聞	批創作を	詩 ク (幼 と)
町本廣さ	幹『ねんどの神さま』新刊紹介〈寄贈図書』	〈中国の童話〉 金おたより	あまえんびょう	3バレンタイン・チョコ/い 、みっちゃん〉 1 さよなら、 一計 一) 一) 一) 一) 一) 一) 一) 一) 一) 一)	〈書評〉『真夜中の ですーのはなし	クラゲ (幼児) によせてとおいこえ ―古
君	は地治	金持ちジャック	サミニノシ	X '	(書評)『真夜中の森で』(R・カーヴェン)フォーのはなし くろさわる)	クラゲ 柏木恵(幼児)によせて/海のそこ/磯あそび/とおいこえ ―古ロプ・ノール人のミイラ
(作)、馬場与志子 (訳)	(作)、水上平吉(訳) (作)、水上平吉(訳)	穴倉さとしほか	日下優子	さん/マフ 2年賀状、 	スーヴェン) くろさわるみこいさなユー	(機あそび/) がれて、 一
32 25	24 20	18 17	15 14	11	11 6	2
広	紹 投 介 稿	紹介	紹介	紹 投 紹	約	紹 創介 作
石風社			J1	乔稿	介	介 作
社 が き	児童文学 新刊紹介(投稿詩)	(「リビン	『新 新 列	元、一九 紹介 みずかみ 投稿〈投稿詩〉 投稿〈投稿詩〉	紹介 本の国・	郎新緋
社がき	児童文学」七~八号新刊紹介〈寄贈図書	(「リビング北九州」、本の国 絵本を作っ	『新 新 列			郎『3組物語
社 が き	七~八号ほか三二	(「リビング北九州」、本の国 絵本を作っ	『いいおへんじをまってます』新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉			郎『3組ものがたり新刊紹介〈寄贈図書緋鯉物語
社 - 水上平吉		_	『新 新 列	元みずるで、台湾で、台湾で、		郎『3組物語

71 70

美子『花のなかの先生』ほか二三冊) ― 24紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅱ(柏木恵 7 英藤朋子 7	冊) ― 6 おり紹介〈寄贈図書・雑誌〉I(あまん	創作 こうのとりと王様 立石寿人 4 グルジム、雨あがり 柏木恵美子 2詩 〈運動場で〉のぼり棒、ブランコ、ジャン	随筆〈ふぐちょうちん〉お祭りがいっぱい	\$	第九五号(1994年・春) 平成六年三月二七日 広告 石風社 ― 裏綉	― あとがき 水上平吉 73 72	デ子『あかあさんがおかあさんになった紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅶ(長野ヒ
投稿〈投稿詩〉白貝の詩 黒木アリ子二、長谷川知子『りんごの花』ほか二二 ―――――――――――――――――――――――――――――――――――	投稿〈投稿詩〉みずかみかずよさんに 谷本清子激励と連帯の集いい 荻野泉報告 九州に児童文学の花開け 水上、草地両氏	・ なかの先生』 にぎやかに出版祝賀会『報告 少年詩さらに発展を「柏木さんの『花の	報告「児童文学セミナーIN黒姫」に参加して『	紹介 新刊紹介〈寄贈	創作 ぼくら島ん子 長崎海上空港ものがたり	説 一	翻訳〈中国の児童文学〉大青山の羊飼い

76 74

72 71

70

40

38 36

伯· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	20	創作 ツバメたちの夜 立石寿人
『仲なおり』引人参加した出版記念祝賀会命	19	曲)
報告 朗読と花と期待をこめて 高瀬美代子詩集		とし『海は青いとはかぎらない』ほか七
一九八八年七月) ————————————————————————————————————		紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅲ(穴倉さ
紹介みずかみかずよの手紙(荻野泉宛、	16	創作 さよならデイビッド 坂上万里子
孫幼軍(作)、水上平吉(訳)	15	『イエロータウン』ほか八冊) ―
翻訳〈中国の童話〉チャブチャブのぼうけん		紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅱ(堀直子
林海音(作)、馬場与志子(訳)	10	創作 ぼくの夏休み はらがいずみ
翻訳〈台湾の童話〉ゆうれいやしき	9	ろこ『ふたりでおつかい』ほか三六冊) ―
之助『ほっほっほー』ほか一○冊) −		紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅰ(ばんひ
紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅳ(長崎源	2	創作 魔女になりたかったエリカ 門脇仁子
創作 マーガレットはマットがすき 荻野泉	1	水上平吉
創作 なんでもあらいます 田中良子		九州・山口・沖縄・児童文学のつどい
すずらん/おやすみお日さま 高瀬美代子		しょう‼ アジア児童文学祭INむなかた
詩(そよかぜ)フリージア、わすれなぐさ、		随筆〈ふぐちょうちん〉8月、宗像で会いま
イラスト 〈絵のページ〉 水中レストラン 中村房子	見返し	紹介 同人の新刊 — — —
柏木恵美子		小さい旗の会(発行所)
ナズナ、ジシバリ、タンポポ、イヌフグリ		富永敏治、世良絹子、久冨正美、水上平吉(編集委員)
詩(野の花〉ホトケノザ、カラスノエンドウ、		第九六号(1994年・夏) 平成六年七月一〇日
投稿〈投稿詩〉ふたりのあの子 黒木アリ子		
福岡教育大学附属小倉小学校6年A組	裏表紙	広告 石風社 ———————————————————————————————————
投稿 みずかみかずよの研究	77	― あとがき 水上平吉

27 27

38 34 32

イラスト〈絵のページ〉かげふみ 中村房子 38久『さいたさいた百十郎桜』ほか三二冊) — 37糸7 業千糸7〈岩則区書・衆書〉Ⅰ(別区景	近月日子(予曽母書・推禁)I はかまをはいたサンタクロース	『いつのまにか名探偵』ほか一五冊) — 22	紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅰ(杉山亮	創作 流星	ちゃん先生』に負けないように 水上平吉 1	随筆〈ふぐちょうちん〉『100 さいのおばあ	紹介 同人の新刊 ― 見返し	小さい旗の会(発行所)	荻野泉、倉掛はるみ、しのはらけいこ、松本梨江、水上平吉(運営委員)	平成六年一〇月三〇日	第九七号 (1994年・秋)		広告 石風社 — 專素紙	一 あとがき水上平吉 65	来信 おたより 丘修三ほか 64	追悼 久本三多さん ありがとう 水上平吉 63	田辺みゆき、世良絹子、水上平吉 60	加田誠先生	追悼 追悼 門司秀子さん、武田幸一さん、目
来信 おたより 内田麟太郎ほか 76投稿〈投稿詩〉ふたごの見分け方 魚本藤子 76	61	報告 偏見なくし心と心結びたい アジア児童	紹介「台湾児童文学」に柏木恵美子の詩『 ― 73	いこ『かみなりのおやこ』ほか三冊) - 72	紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅳ(せなけ	孫幼軍(作)、水上平吉(訳) 68	翻訳〈中国の童話〉チャブチャブのおつかい	周鋭(作)、馬場与志子(訳) 65	翻訳〈中国の童話〉PP 事変	詩 ムラサキシキブ/おふろで 高瀬美代子 64	か九冊) - 63	子『100さいのおばあちゃん先生』ほ	紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅲ(岩崎京	創作 バイトいたします しのはらけいこ 55	福岡教育大学附属小倉小学校6年 A 組 54	投稿 みずかみかずよの研究	創作 すすきの原のエーデルワイス 倉掛晴美 41	柏木恵美子 40	詩 シカの釣針―考古博物館で―/せみ

36 34 33 31 25 24 22 21 18 17	『おばあちゃんのせなか』ほか四冊) ―	10 9 8 6 4 2 1 显著	広告 石風社 大学 (1995年・春) 平成七年四月二三日 第九八号 (1995年・春) 平成七年四月二三日
	紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅱ(砂田弘	77	— あとがき水上平吉
	新刊紹介〈寄贈図書·雑誌〉Ⅱ(砂田	77	あとがき
14	創作 ふしぎなキップ 日下優子	77	あつこ『あかね色の風』ほか一冊)
11	創作 サクランボのなるころ 渡辺実穂		紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉V(あさの
10	んじ『子ヤギの木』ほか一一冊)	77	滕毓旭(詩)、水上平吉(訳)
)	紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅰ(北村け	,	翻訳〈中国児童詩〉秋の招待券/草

魚本藤子	〈投稿詩〉野ばら	投稿	2	立石寿人	創作 春子の駅
-	スー』ほか六冊)		1	しく 水上平吉	集『いのち』をよろしく
ちょうグーと	バージェス『ふたごのがちょうグーと			みずかみかずよ全詩	随筆〈ふぐちょうちん〉
〉Ⅲ(マーク・	新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉	紹介	見返し		紹介 同人の新刊
(作)、馬場与志子(訳)	林良(作)、			小さい旗の会(発行所)	ds
めいたんてい	〈台湾の童話〉パパはめいた	翻訳		松本梨江、水上平吉(運営委員)	荻野泉、倉掛はるみ、しのはらけいこ、松本梨江、水上平吉(運営委員)
<u>□</u>	『トレモスの風屋』ほか一冊)平成七年七月二三日	第九九号 (1995年・夏)
□〉Ⅱ(小倉明	新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉	紹介			
松原学	星のあかちゃん	創作	裏表紙	I	広告 石風社
田中良子	ブタがうつった	創作	65	水上平吉	ーあとがき
しんきみこ	ちかみちをとおって	創作	65	ほか一七冊 -	『詩集 海峡の唄』ほか
柏木恵美子	カバ、白クジャク			・雑誌〉VII(石川湍	紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉
テナガザル、	〈動物園で〉アミメキリン、	詩	62	福岡教育大学附属小倉小学校6年 A 組	福岡教育大学母
久富正美	イーラスト〈絵のページ〉夏の日のかげ	イラスト		究	投稿 みずかみかずよの研究
号記念) ほか —	50周年・「小さい旗」 100 号記念)		62	於記念会 ^② 日下優子	号』 苦節40年の出版記念会
^学者協会創立	と朗読の集い」(日本児童文学者協会創立			富永敏治『とべ!!翼竜	報告 さらなる飛翔を 富
なかた」、「講演	「アジア児童文学祭inむなかた」、	募集	61	池田善朗ほか	来信 おたより
荻野泉	サブさん	創作	60	ちゃん』ほか一〇冊) —	子『ずうっとおにいちゃん』
しのはらけいこ	ある晴れた日に	詩		・雑誌〉VI(岸川悦	紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉
ı	のこる名画美術館④』)		60		八三年一月一八日付
誌〉I 『心に	新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉	紹介		紙(椎窓猛宛、一九	紹介 みずかみかずよの手紙

51 49 48 45 39 35 34 32 30 15 14 13

		広告 石風社 — 裏表紙	― あとがき 水上平吉	水上平吉、田辺みゆき、荻野泉、松尾初美	追悼 追悼 徳永和子さん	か一三冊	ろ子『そのとき、ぼくは戦場にいた』ほ	紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉V(坂井ひ	りが献花② 馬場与志子	ロー」詩碑びらき 太鼓ひびき、百人余	報告 子どもたちの朗唱高らかに 「金のスト	金近(原著)、水上平吉(訳)	翻訳〈中国の連環画〉さぎ師 さぎにおぼれる	ラ、4 おるすばん 高瀬美代子	1 おしっこ、2 だいっきらい、3 カメ	詩めざめ/〈わたしはおねえちゃん〉	来信 おたより 木暮正夫ほか	子『まほうのあめだま』ほか二八冊) ―	紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅳ(安房直
		表紙	77	73		72			69			56		54			53	52	
の作品 ④ その他)⑵ ――――――――――――――――――――――――――――――――――――	長野ヒデ子、今西祐行、君島久子 5木暮正夫、古田足日、滕毓旭、皿海達哉、	飯田栄彦、川村たかし、星加輝光、	那須正幹、たかしよいち、関英雄、	しかたしん、岩崎京子、渡辺誠毅、	長崎源之助、目加田さくを、中江利忠、	紹介 がんばれ‼「小さい旗」 メッセージの花束	ざいます 長野ヒデ子 4	イラスト〈絵〉小さい旗、100 号おめでとうご	らに前進を!! 水上平吉 1	随筆〈ふぐちょうちん〉100 号踏まえてさ	一九九五年一一月号掲載) 水上平吉 見をし	ぼ』(「書譜」116 号(現代書研究社、	長崎源之助・作『ガンジイちゃんのつ	紹介〈いのちの輝きを〉読書のよろこび14	小さい旗の会(発行所)	荻野泉、倉掛はるみ、しのはらけいこ、松本梨江、水上平吉(運営委員)	平成七年一一月二六日	創刊40周年記念号	第一○○号 (1995年・晩秋)

創作 森の神 フンババ 松原学創作 森の神 フンババ 田中良子創作 あとでの森 田中良子 田中良子 日中良子 日野田 『仏宗 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日	作子くじらポーの冒険	詩 路上の少女 くろさわるみこ 名介 同人の新刊 ー		詩 サイレン/まつぼっくり 柏木恵美子	太郎『山の子三郎』ほか七冊)	紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅱ(窪田善	創作 じいさんの顔 坂上万里子	一五冊)	三『ぼくと時計の時差について』ほか	紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅱ(寺山富	創作 ゆりかの参観日 古賀なな	幹『ズッコケ発明狂時代』ほか一冊) ―	紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅰ (那須正	創作 いじわるピエロとわたし 荻野泉	創作 ふたりだけの海 松本梨江	イラスト〈絵〉 100本のはた 久冨正美	紹介 年表「小さい旗」40年のあしあと -
64 61 60	59 5	58 57	7 56	55	54		48	47			42	41		36	30	28	25
	広	紅	!来		I	報		翻	創	創	創	創				悉羽	詩
	広告 石	紹 介 一 亡		同	— あ	報告ア		翻訳合	創作す	創作 小	創作 ほ	創作う		۲۷	ひ	翻訳合	詩も
	石	一九九五年九月二六日掲載) 紹介 亡き妻の全詩集出版 ('朝日新聞」夕刊	おたより	— 同人名簿		アジア児童文学祭 in むなかた⒀	秦文君(作)、馬場与志子(記	翻訳〈中国の童話〉いとこが来て	すてきなともだち としちゃん	小さな風のはなし	ほうせんか	うみへ	滕毓旭(詩)、水上平吉(記	い/子ブタはなんびき?	ひっくくる/トラはシジュウカラがこわ	翻訳〈中国・大連の児童詩〉こザルがクマを	もえのぼっちゃこ
	石風社 — 臺	一九九五年九月二六日亡き妻の全詩集出版。	おたより		水上平吉	アジア児童文学祭 i n	訳	^	すてきなともだち				(詩)、		ひっくくる/トラはシジュウカラがこわ	〈中国・大連の児童詩〉	

	31	方藤朋子	創作 おじいちゃんの親友	
来信 おたより はたちよしこほか	30		タイ』ほか一五冊)	
(1)		ハートいき	デ子『せとうちたいこさんデパ	
日『月の上のつよがりロボット』ほか四		Ⅱ(長野ヒ	紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅱ	
紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅳ(古田足	27	石橋ちえこ	創作 とんだきんちゃくぶくろ	
パーティー(27) 富永敏治	25	久冨正美	ィラスト〈絵のページ〉ぼくのひどけい	
報告『いのち』の丸山豊記念現代詩賞受賞祝賀	23	高瀬美代子	詩 空きかん/ひこうき雲/カメ	
黒瀬圭子	18	いれた 荻野泉	創作 マーガレットのマットがぬすまれた	
―児童文学セミナーと沖縄をたずねる旅(空)	17	八冊)	わひでゆき『ぱくり』ほか一八	
報告 同人9人参加し「命どう宝」を実感		I (ふじか	紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉	
パーティー (25) 世良絹子	2	立石寿人	創作 秋風のころ	
100号記念 購読と朗読のつどいと	1	水上平吉	詩賞 『いのち』輝く	
童文学者協会創立50周年・「小さい旗」		^豈 記念現代	随筆〈ふぐちょうちん〉第5回丸山豊記念現代	
報告 感動のひととき・にぎやかに―日本児			紹介 同人の新刊	
金近(原著)、水上平吉(訳	見返し	江		
翻訳〈中国の連環画〉キツネにだまされた狩人		九日掲載) (24)	新聞」夕刊、一九九六年三月二九日掲載)খ	
詩 かわいいまじょ 矢部協子		賞(「朝日	第5回丸山豊記念現代詩賞を受賞	
愛薇(作)、馬場与志子(訳)		り』に思う	紹介 みずかみかずよ全詩集『いのち』	
翻訳〈マレーシアの児童文学〉パパの日記		会(発行所)	小さい旗の会	
曲)		平吉 (運営委員)	荻野泉、倉掛はるみ、しのはらけいこ、松本梨江、水上平吉(運営委員)	
一郎『ニホンカワウソの願い』ほか五六		平成八年五月二六日	平成八	
紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅲ(大西伝			第一〇一号 (1996年・初夏)	

47 43

詩 みちしるべ しのはらけいこ	児童公園、秋のプール 柏木恵美子 23	詩 〈公園〉アガパンサスと母子像、草かり、 来信	創作 サケよ、ふたたびふるさとの川へ 倉掛晴美 2	水上平吉 1	随筆〈ふぐちょうちん〉詩碑ができます ^{②8} 報告	紹介 同人の新刊	七月号掲載) 岡田武雄 見返し	味(「ひろば北九州」121、一九九六年 紹介	のちの詩 ― 故みずかみかずよ全詩集の意	紹介〈切り抜きジャーナル〉詩といのち、い 随筆	小さい旗の会(発行所)	荻野泉、倉掛はるみ、しのはらけいこ、松本梨江、水上平吉(運営委員) 翻訳	平成八年一一月二四日	第一○二号 (1996年・晩秋) 翻訳	創作	広告 石風社 — 專表紙	一九九六年五月掲載) 水上平吉 68	詩集 いのち』(「書道之友」266号、 紹介	紹介 丸山豊賞になった『みずかみかずよ全 創作	あとがき水上平吉67	げる『海をおよぐ大シカ』ほか二○冊) − 66 詩	
着 かク が わら (世 良 で) を (世 良 で) を (世 良 な) を (世 良 な) を (世 な) を (おたより	よを語る夕べ②	と合唱と ふるさとの詩人み		た』ほか六冊)		新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉		_	車培晶(作)、		年紅 (作)、馬	_		ンとミリ』ほか五冊)	『黒ねこサンゴロウ	新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉	作 一○○回のクリスマスイブ	スト〈絵のページ〉 いちょうのおち		
		穴倉さとし	柏木恵	ずかみかず	ークと朗読		んがわらっ		荻野	とたずねて			^网 場与志子(i	うの自転車	下田麻紗		つづき①ケ	I (竹下文	しんきみ		しのはらけい	

	同人名簿(四八名) カ上平吉		- リリー リー	- ナナモニ 戸掲車) カード 言
1 N	魚本	来信	記 区	
1	、投稿詩〉ある日のこと 石澤香苗	^		紹介〈切り抜きジャーナル〉「大賞」に十二歳
	ンター 徐徳霞(作)、水上平吉(訳)	ン		小さい旗の会(発行所)
	(中国の童話) いい夢みせますゲームセ	翻訳〈		荻野泉、倉掛はるみ、しのはらけいこ、松本梨江、水上平吉(運営委員)
	シュン『とべ!出水のツル』ほか三一冊) ―	シ		第一〇三号(1997年・春) 平成九年三月九日
	新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅲ(関口	紹介 新		
	懐冰 (作)、馬場与志子 (訳)		裏表紙	広告 石風社 — — — —
	〈マレーシアの児童文学〉きらわれっ子	翻訳〈	62	268、一九九六年七月掲載) 水上平吉
	ゆずばあちゃん 下田麻紗子	詩の		光っちゃんがわらった』(「書道之友」
	新雪―立山にて 柏木恵美子	詩新		紹介〈切り抜きジャーナル〉『お日さま笑い
	やまのうえのモコたち松原学	創作や	61	九月五日掲載) — —
	まただし『うみキリン』ほか一九冊) ―	丰		のふしぎな夏』(「朝日新聞」、一九九六年
	新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅱ(あきや	紹介 新		創作童話を出版 ― 荻野泉『ムーンとぼく
	シマリスがいた春 渡辺実穂	創作シ		紹介〈切り抜きジャーナル〉「伊都国」が舞台
	〈絵のページ〉春の旅立ち 久冨正美	イラストへか	60	— 同人名簿(五一名) — —
	子『地球が動いた日』ほか三二冊) ―	子	59	ほか一六冊) — — —
	新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅰ(岸川悦	紹介 新		童文学者協会編『戦後児童文学の50年』
	ジングルが聞こえる③ 立石寿人	創作ジ		紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅳ(日本児
	水上平吉		58	ゆき『ふたりはチビ山同盟』ほか六七冊) ―
	〈ふぐちょうちん〉詩碑びらきは3月30日	随筆へ		紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅲ(田辺み

創作 レッツ!プレイボール さかのうえ万里子 38 イラスト〈絵のページ〉こんやはおちるかな 久冨正美 36来信 おたより 星加輝光ほか 35 介『ようせい』ほか四九冊) 4	紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉I(西本鶏創作 はなしがい昆虫記 渡辺実穂 2 東三話を 水上平吉 1	随筆〈ふぐちょうちん〉心のこもった郷土の紹介 同人の新刊 ― 見返し 小さい旗の会 (発行所)	倉掛はるみ、世良絹子、水上平吉(運営委員) 平成九年七月一三日第一○匹号 (1997年・夏)		271、一九九六年一○月掲載) 水上平吉 4紹介〈切り抜きジャーナル〉地球を守ろう	載) 水上平吉 43(「書道之友」270、一九九六年九月掲ンタジー『ムーンとぼくのふしぎな夏』
紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅳ(あびる ― 執筆者住所(七名)	歌って祝福!	冊) ― 73紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅲ(山花郁	翻訳〈中国の児童文学〉鷹と少年翻訳〈中国の児童文学〉鷹と少年	美子	一九九七年五月九日掲載) ― 59紹介〈切り抜きジャーナル〉富永敏治『地	下田麻紗子 58詩 わらび/おどりこ草/たんぽぽ/つつじ 寿美『ぼくらのバス』ほか一三冊) − 57名介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅱ(大島真

創作 ノロリとトロリのぼうけん
中下啓子

第一〇五号 (1997年・晩秋) 平成九年一一月九日 紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉 ほか三〇冊) 佳子『イグアナくんのおじゃまな毎日』 III (佐藤多

小さい旗の会(発行所

倉掛はるみ、世良絹子、水上平吉(運営委員)

〈ふぐちょうちん〉かずよ記念の児童詩

紹介

同人の新刊

創作 五月のよろこび を公募 しんきみこ 水上平吉

2 1

翻訳

新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅰ(かみや

しん『ぞうむしくんがんばる』ほか三九

23 22

あとがき

〈竹と遊んだ日 ― 合馬竹林公園にて〉 岩森道子ほか

来信

おたより

冊

竹林のなかで、竹とんぼ、虫の音楽隊、

バリンビン―フィリピンの民族楽器

柏木恵美子

24

おじいちゃんとホタル

新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉 II

『くらかけ山の熊』ほか二二冊

32

広告

石風社

2 8 4

〈絵のページ〉かげのかくれんぼ 久冨正美

紹介

イラスト

(立松和 田中良子 28 26

見返し

募集

「県別ふるさと童話館」40

の原稿募集

翻訳

〈中国の児童文学〉脱穀場の笛の音

薛涛

(作)、水上平吉 『福岡の童話

訳

38

37

43

44

〈中国の児童文学〉父が残してくれたもの 夏有志 (作)、馬場与志子 (訳)

紹介

新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅳ(柏葉幸

子『ドードー鳥の小間使い』ほか二冊)

水上平吉

56 55

57

同人名簿(四五名) 〈切り抜きジャーナル〉生きる喜びいっ

紹介

道之友」279、一九九七年六月掲載) ぱい『中学校で読みたい詩 12か月』(「書

〈切り抜きジャーナル〉ムツゴロウたち

の叫び『海をかえして!』(「書道之友」 一九九七年一一月)

水上平吉

59

水上平吉

58

49

裏表紙

詩 ハナイカダ/ウツボ 柏木恵美子創作 ゆき 矢部協子	創作 道のむこうに しのはらけいこ	太郎『ともだちや』ほか一九冊)	新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅲ(内	創作 おっしょい、山笠 田中良子	一七曲) — — —	久生『中学生のための詩の創作』ほか	紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅱ(畑島喜	創作 今山の石の歌 荻野泉	子『お母さんの変身宣言』ほか一四冊) ―	紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅰ(川越文	創作 チヨちゃんとフミちゃん 坂井ひろ子	創作 オオカミになりたい - 髙木美樹子	水上平吉	随筆〈ふぐちょうちん〉同人3氏の受賞を喜ぶ⑶	紹介 同人の新刊 見	小さい旗の会(発行所)	倉掛はるみ、世良絹子、水上平吉(運営委員)	平成一〇年六月二一日	第一○六号 (1998年・夏)
37 35 30	26	25		21	20			16	15		11	2	1		見返し				
三月掲載) ――――――――――――――――――――――――――――――――――――	紹介〈切り抜きジャーナル〉絶望の中から生き	(四二名)	ー あとがき 水上平吉	歌われ朗読されて 坂井ひろ子	報告 児童の献詩 春空にひびく かずよ詩も	彰式 (碑前祭)―献詩された優秀賞作品 ―	報告 盛会だった みずかみかずよ記念児童詩表	紹介 阿南哲朗とみずかみかずよ展33 ―――	北陸児童文学賞を受賞して 立石寿人	― 「もっと真剣に」と天の声―第九回新・	来信 おたより 村中李衣ほか	か四冊)	幹『おばけがっこうの大うんどう会』ほ	紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅳ(那須正	一九七一年 常星児(作)、水上平吉(訳)	翻訳〈中国の児童文学〉あるふつうの子の	黄慶雲(作)、馬場与志子(訳)	翻訳〈中国の児童文学〉バンバンの入学	イラスト〈絵のページ〉ぬってるな 久冨正美

58 57 55

51 50

平成一〇年一一月一五日)七号(1998年・晩秋)		告 石風社
廿			— 裏表紙
美子『古い写真のひみつ』ほか六冊	紹介 新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉Ⅲ	沈振明(作)、馬場	翻訳〈中国の童話〉最後のちこく
一	(水野寿	場与志子(

倉掛はるみ、世良絹子、水上平吉(運営委員)

小さい旗の会(発行所

ずよ展 〈ふぐちょうん〉阿南哲朗とみずかみか 紹介

同人の新刊

髙木美樹子 水上平吉 2 1

新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉 I (たかど 創作

手のひらの海

のほうこ『夜にくちぶえふいたなら』ほ

か四七冊)

イラスト〈絵のページ〉つきよのさんぽ 久冨正美

広告

石風社

日掲載

柏木恵美子 高瀬美代子

52 51 50 48 46 45

平尾台—千仏鍾乳洞

到津の森の動物たちのつぶやき はらがいずみ ある魂/さなぎ

詩

来信 おたより 〈中国の童話〉オオカミの大笑い 柳生じゅん子ほか

徐徳霞(作)、水上平吉 (訳)

53

新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉 ふしぎの時間割』ほか七冊 II (岡田淳

56

同人名簿(四二名) 子『かぐやひめ』ほか九冊)

見返し

紹介

あとがき

新刊紹介〈寄贈図書・雑誌〉

IV

(岩崎京

62 61

水上平吉

61

60

訳

57

紹介 〈切り抜きジャーナル〉心に響く さわや

かな思い ―第14回お茶の間ろんぶん優秀

入選・松尾初美「世界に一冊の絵本」

(「宮崎日日新聞」、一九九八年八月一二

63

- 和光小学校 て書かれた学級通信などが紹介される (東京都)から送られたみずかみかずよについ
- (2)うた」のなかで、詩人・松永伍一がみずかみかずよの詩に 四日に再放送された。 ついて話した内容を文字におこしたもの。一九八九年三月 九八七年三月七日放送の NHK ラジオ第二放送 「四季の
- (3)楽章 第五楽章「二月の雪」、第六楽章「備前焼の大徳利」、第七 組曲は第一楽章「馬でかければ」、第二楽章「ケヤキの新 第三楽章「おはなしだいすき」、第四楽章「かみなり」、 「燃える樹」で構成
- (4)第八四号掲載)が受賞。 富永敏治「サーモンピンクの旗はひらめく」(「小さい旗 主催は北陸児童文学協会。
- (6)(5)九九〇年九月三〇日、 九九〇年一〇月一一日・一二日、 橋山荘 (八幡西区)にて開催 「愛に生きた詩人 みず
- (7)宰の林鍾隆のこと。 台湾の児童文学雑誌 「月光光」(のち「台湾児童文学」) 主

が展示された。

同時に偲ぶ会も行われた。

かみかずよの世界展」(東京)開催。

原稿、

書簡、

書籍など

(8)光光」と北九州の「小さい旗 朝日新聞」(一九九一年一月 一一日)の記事〈台湾の 児童文学誌同士が交流 月

転載あり

- (10)(9)九九一年三月一六日、 広州酒家 (福岡市) にて開催
- 「『主婦詩人』故みずかみさんの作品 転載あり。 合唱譜出版 (「朝日新聞」、一九九一年八月二三日) に」(「朝日新聞」、 一九九一年四月一九日)、「『燃える樹 新たに3社の教科書
- 一仲直り」は台湾の児童文学雑誌 「台湾児童文学」第八号に

(11)

翻訳掲載された。

- (12)念講演会「わが児童文学のロマン」などが行われた。 一九九三年四月一二日、 福岡国際ホールにて開催。 子安
- (13)美知子講演会「 ミヒャエル・エンデの人と文学」などが行 一九九三年一〇月二日~三日、 黒姫童話館にて開催。
- (14)一九九三年一一月二八日、 小倉ステーションホテルにて
- (15)にて開催 一九九四年 月一 六日、 ホテルニュープラザ (久留米市

九九四年四月二四日、

日本浪漫座

(福岡市)

- (18)(17)(16)一台湾児童文学」第一四号に、柏木恵美子の詩 てんとう虫」「花のなかの先生」が紹介された。
- にて開催 九九四年八月二〇日~二一日、 韓国の児童文学者イ・サンクム講演会などが行 宗像ユリックス

われた。

- (21) (20) (19) 第二一回部落解放文学賞児童文学部門入選
- 詩碑 宮川ひろ、長崎源之助からのメッセージも掲載 らきが一九九五年四月十六日に行われた。あまんきみこ 九九五年三月二六日、 「金のストロー」は下関中央霊園に建立され、詩碑び 檣山荘 (北九州市) にて開催
- (23)(22)同人五〇人のアンケート方式での短信
- ニトークリレーなどが行われた。 祐行の記念講演会「ヒロシマから中国を見る」、 一九九五年八月一九日、宗像市中央公民館にて開催。 朗読劇、 今西 Ξ

(32)

高瀬美代子、柏木恵美子らの詩の朗読などが行われた。 演会「まわり道の幸せ−一○○冊にこめた思い」 て開催 森崎和江は丸山豊記念現代詩賞の選考委員を務めていた。 九九五年一一月二六日、 長野ヒデ子講演会「絵本だいすき」、長崎源之助講 福岡センタービル (福岡市) に のほ か

(25) (24)

- (26)にて開催 一九九五年三月九日~一二日、 嘉手納町民会館 (沖縄県
- (27)九九五年四月二一 貝 リー ガロイヤルホテル小倉にて
- (29)(28)詩碑 きのとう」が八幡の小伊藤山公園に建てられることを紹介。 ふるさとの詩人みずかみかずよを語る夕べ」 九九六年八月八日、 「金のストロー」 (下関市) 北九州都市協会の文化事業として に続き、 が開催 盲 の詩碑「ふ 場所

げます。

- 水上平吉、 は女性センター・ムーブ(北九州市)。森崎和江、 による合唱組曲「燃える樹」の合唱などが行われた。 小林慎也によるトーク、 北九州少年少女合唱 黒瀬圭子、
- (31)(30)第九回新・北陸児童文学賞受賞。
- よる歌、 小伊藤山公園にて開催。 詩碑「ふきのとう」の詩碑びらきは、一九九七年三月三〇日、 献花、 詩の朗読などが行われた。 かずよが勤めた尾倉幼稚園園児に
- ていますか―」が第二四回部落解放文学賞児童文学部門入 学賞受賞、 立石寿人「ジングルが聞こえる」が第九回新 柏木恵美子 坂井ひろ子「闇の中の記憶―ムクゲの花は咲い ,『詩集 幻魚記』が第三四回福岡県詩 北陸児童文 |人賞
- (33)かみかずよが第九回目 れる旨の告知。 一九九八年一一月二六日~三〇日、 北九州市教育委員会主催の作家展で、 小倉井筒屋にて開

付記

本総目次作成にあたり、 の雑誌をお借りして作成しました。ご協力に心よりお礼申し上 第九九号については粟谷さやか氏所蔵

寄贈資料 二〇二〇年度

書家。

雲心書道会主宰。

みずかみかずよと

■みずかみかずよ関連資料 一式 (詩稿、書簡など)

るもの。

あった。

書簡は八六年、八七年頃の交流がうかがえ

(一九八一年) に北九州市民文化賞を受賞、

親交が年

寄贈者 山本飛雲

受入日 二〇二〇年四月

北九州市出身の児童文学者・みずかみかずよ

(一一通)、記事コピーなど。料。「いま 美しく輝やいて」料。「いま 美しく輝やいて」料。「いま 美しく輝やいて」

■麻生久関連資料 一式(メモ、資料ファイルなど)

受入日 二〇二〇年四月

た備忘録や視聴覚資料。寄贈者は麻生久の長女。資料。麻生久および「沙漠」の活動が詳細に記され引した詩人・麻生久(一九一九~二〇一〇)の旧蔵詩誌「沙漠」の代表を長く務め、北九州詩壇を牽

寄贈者の山本氏(一九四○~)は北九州市在住の

■川柳関係資料 一式(色紙、短冊、書籍など)

寄贈者 古谷龍太郎

受入日 二〇二〇年五月

古谷龍太郎氏(一九三七~)は全日本川柳協会幹事で、川柳くろがね吟社主幹。寄贈資料は、古谷氏、野尻佳水、手嶋吾郎、金子哲也、深堀正平ら現代川事で、川柳くろがね吟社主幹。寄贈資料は、古谷氏、

黒田征太郎原画ほか

四九〇点

受入日 二〇二〇年一〇月寄贈者 黒田征太郎

絵本『ぼくみたんだ』『うたえ!らじーく』『落語絵本』黒田征太郎氏(一九三九~)は、現在北九州市在住。画家・イラストレーターとして国内外で活躍する

の黒田氏による原画など。



北九州市立文学館紀要 第4号 2022年3月31日 発行

編集・発行 北九州市立文学館 北九州市小倉北区城内4番1号 電話 093-571-1505

製 作 瞬報社写真印刷株式会社

※凡例については、各論考に記しました。

※現在では適切でない表現の見られる資料があります。当時の社会状況を 理解するため、そのままとしました。御理解の上、御了承ください。 ※本内容の無断複製、転載等の行為を禁じます。